





審査結果報告書

2020 年 1 月 27 日

主査 氏名 山下 拓 

副査 氏名 隈元 雄介 

副査 氏名 天羽 康之 

副査 氏名 三根 信 

1. 申請者氏名: DM15031 牧 恵

2. 論文テーマ: TROY expression is associated with pathological stage and poor prognosis in patients treated with radical cystectomy
(膀胱全摘術標本での TROY 発現と臨床病理学的因子に関する検討)

3. 論文審査結果 :

北里大学病院において、1999年2月から2011年10月までの間に膀胱全摘除術が施行された尿路上皮癌136例を対象に、腫瘍壊死因子受容体ファミリーに属するTROYの発現が膀胱癌組織の免疫染色で評価された。評価は腫瘍での発現割合と染色強度によって0~9点でスコア化され、0をnegative、1以上をpositiveとした。TROY発現は44.1%の症例で認められ、主に細胞壁で発現が認められた。TROY発現は筋層浸潤癌およびNestin発現と有意な相関関係が認められた。またKaplan-Meier生存解析において、TROY発現症例では無増悪生存(PFS)および疾患特異的生存(CSS)が有意に不良であった。多変量解析では、リンパ節転移のみがPFSおよびCCSについての独立した予後因子であり、TROY発現はPFSでは独立した予後因子とはならず、CCSではmarginalな予後予測因子であった。TROY発現の評価は、膀胱全摘除術症例での予後予測のバイオマーカーとしての有用性が一定程度示唆され、今後、治療選択においても有用なマーカーとなる可能性を秘めていると考えられる。以上が研究結果として報告された。

一方、本研究の限界として、①単一施設による後ろ向き研究である点、②TROYの癌組織での分子生物学的役割については検討できていない点、③TROY発現と化学療法や放射線治療の治療感受性についての検討はなされていない点などについての指摘もあった。

以上のように、本研究には今後検討されるべき課題を残しており、実臨床での意義を求めるにはさらなる検討が必要ではあるものの、膀胱全摘除術が施行された尿路上皮癌患者における予後予測に一定の関与を示し、癌幹細胞マーカーであることが示唆されているNestinとの有意な相関を認めた点は新しい知見であり有意な研究であると評価された。